

産教連通信

技術教育と家庭科教育のニューズレター

産業教育研究連盟発行
<http://www.sankyoren.com>

目次

□ 産教連のこれまでの活動の総括をする今夏の全国研究会	1
□ エッセイ「週末農業から広がる想像」	三村 純 2
□ 報告「きものあれこれ」	野本恵美子 4
□ 全国研究会開催案内	11
□ 連載「産教連と私(4)」	三浦基弘 14
□ 編集部ならびに事務局から	30

□ 産教連のこれまでの活動の総括をする今夏の全国研究会

昨年(2025年)の今頃は、暑さもさることながら、少雨による水不足がささやかれていたかと思います。ところが、今年は例年以上に雨量が多く、洪水対策にも気を配らなければいけないという話です。これまで幾多の困難を乗り越えてきた人類ですが、気候変動対策一つをとっても、まだまだ道半ばというところでしょうか。

さて、今夏実施の全国研究会(第75次技術教育・家庭科教育全国研究会)の開催案内が本号11～13ページに掲載されています。この研究会の主催団体である産業教育研究連盟(略称、産教連)の活動を振り返ってみると、1949年2月に職業研究会として発足した後、1954年9月に今の名称に変更し、現在に至っています。実に75年以上の活動実績があります。

そこで、今年は研究会全体を研究活動の総括の場として位置づけ、今までの活動を振り返るとともに、今後の活動をどのようにしていくか、参加者全員で討議することを想定した研究会としています。そのため、昨年の研究会以上に時間を割いて討議できる日程を設定しています。詳細は開催案内をご覧ください。

現在、中央教育審議会(中教審)で次の学習指導要領改訂へ向けて審議が進められています。技術・家庭科が1958年に誕生してから70年近く経過していますが、ここへ来てこの教科が大きく変貌するものと予想されています。今回の研究会では、こうした状況も踏まえながら、討議を展開していけたらよいと考えています。

以上のような背景を考慮すると、今年の全国研究会は大変重要な意味を持つと考えられますので、多くの方の参加を望んでいます。研究会はあと1ヵ月足らずに迫りましたが、当日参加でもかまいませんので、いっしょに討議の輪に加わってみようではありませんか。

■ 自然相手の農業の醍醐味

4年(2022年)ほど前から、週末農業を続けている。最寄り駅から電車で15分ほどの近間にある貸し農園の一角を借りて、ベテランの野菜作りインストラクターさんの指導のもと、老若男女30名ほどの方々と、ダイコンやジャガイモ、ナス、ネギ、白菜など、30種類近くを年間を通じて栽培する。はじめて自由区画を借りた年に、我流で育てたダイコンが短期間でよく採れ、思いのほか美味しかったのに味をしめて、通年の野菜作りコースに申し込み、現在に至っている。

平日は、ずっと机に座って文章を読んだり、電子メールをやり取りしたりが大半の仕事なので、土日の昼間、日差しのさす屋外で鍬をふるったり、トマトの茎を這わせるネットを張ったりといった軽い肉体労働をするのが純粋に新鮮で、よい気分転換になる。仕事の関係者や家族とも違う方々と一緒に文字どおり汗をかくのは、デジタル機器に浸りきった心身にほどよい刺激を与えてくれる。採れたてのキュウリやインゲンの瑞々しさもはじめて知った。また、デスクワークの日々では大して気にかけなかった、晴雨などの日々の天候、日の出と日の入りの時刻を意識するようになった。採



写真1 茂っているジャガイモの葉

れ過ぎて自宅で食べきれないダイコンやニンジン、ご近所や職場でお裾分けして、思わぬ交流の手段にもなっている(写真1)。

そもそもなぜ、野菜作りをやろうと思ったのか？ 思い返しても、これという明確な理由は思い出せない。日本は早晩、コメを含めて食糧不足に陥り、戦時中のようにイモを主食にせねばならなくなるだろうという不吉な新聞記事を読んだこともきっかけの一つではあるけれど、畑の見学で目にした人た

ちのどこか満足気な表情や、野菜や雑草が発する草いきれに、子どもの頃に野原を駆け回っていた原記憶を刺激された気もする。また、学生時代に何度か参加させてもらった遺跡発掘も楽しい思い出としてあり、同じく土をいじることに、どこかで惹かれたのかもしれない。実際にやってみて、生き物が育つ過程が間近で体験でき、しかも作ったものを食べられるという「生産性」が、野菜作りならではの魅力であると感じる。

これまで、それほど野菜好きではなかったのだが、教わりつつもみずから育てて食べるようになり、売っている野菜を含めて、形や鮮度、味、季節感、作り手の手間暇

などにも、及ばずながら思いを巡らせるようになった。もちろん、本業の片手間に趣味でやっている程度なので、それを生業としている農家の方々のありようとは比ぶべくもない。ただ、想像力は幾分か働くようになった気がする。気候危機が加速し、酷暑下の作業がどれだけ危険になっているか、知恵のまわるカラスや虫たちの飽くなき攻勢、台風の雨風からどう作物を守るかなどなど……。自然相手の仕事の難しさや醍醐味は、週末農業からも少しは感じ取れる。

■ 自分で野菜を育てる意義

いつぞや、「魚の切り身が、海を泳いでいると思っている子どもたち」がメディアで話題になった。誇張された都市伝説の面もあるかもしれないが、顧みると、都会生活をしていて生きた丸魚を目にする機会は、水族館や居酒屋の水槽を除けばほぼ皆無だし、野菜に関していえば、それらが「生きた」状態で目にする機会は、畑が身近にない限り、あまりないだろう。自分で作ってみると、ジャガイモの作物としての優秀さ(種イモからいかに増えることか)や、ブロッコリーの葉の巨大さ、ニンジンを芽吹かせるのがいかに難しいかなど、はじめて知ることばかりだった。農家出身でもなく、スーパーの店頭にきれいに並んだ野菜を買って消費するだけならば、「切り身魚」が泳いでいると思っている子どもと、意識としてはそれほど変わらないのかもしれない。ご依頼を頂いて本稿を書くうちに、不遜にも、そんなことも考えた。

野菜作りを通じて、「食べ物」を自分の手で育てたり獲得したりする活動は、人間にとってかなり大事なことのようになってきた。高度に分業化が進んだ現代では、自分のような都市生活者は忘れがちなことだが、生物としての生存に欠かせない「食」を全面的に他者に依存することは、みずからの生殺与奪を委ねることでもあり、なかなか危ういことなのではないだろうか。昨今の「令和の米騒動」は氷山の一角に過ぎず、コメ以外の食料生産全般を考えても、事態は深刻さを増しているように感じる。その点で、農・漁業を含む一次産業が社会的に軽視されているのはどこかいびつだし、経済や軍事以前に、国民の存亡に直結するようにも感じられるのだが……。

週末農業の合間に、ついそんな空想に駆られる。昨日も、冬に収穫するネギを植えつけ、賢いカラスからどうにか守って大きくなったナスやピーマンを収穫して、夕飯に麻婆茄子を味わった(写真2)。美味だった。自分でできる範囲から少しずつ、趣味を通じて培った感覚を忘れずに、同好の士を増やしていけたらと密かに願っている。

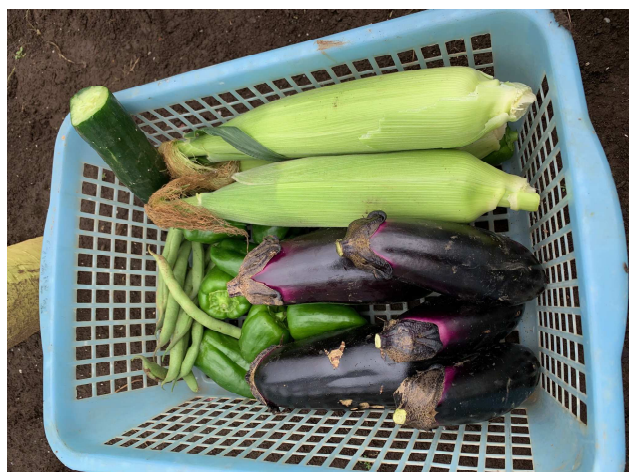


写真2 最近収穫した野菜

きものあれこれ

野本 恵美子

…1 きものの歴史

「きもの」は本来、着るもの全体をさす言葉であるが、西洋から入って来た服を「洋服」と言ったので、それまであった服をきものと言う。洋服に対して「和服」という言い方もする。

ところで、きものはいつ頃からこの形になったのだろうか。古代から奈良時代にかけて、布を巻き付けて着るスカート型や貫頭衣のワンピース型、股が分かれたズボン型の服が着られていた。

現在のきものの形は「呉」の国から入って来たものだと言われている。呉の国の服、呉服である。呉服と言うのはこれが始まりだと言われている。江戸時代には日本の絹で作られたきものを呉服と呼んだ。昭和時代にはきものを扱う店を呉服屋と呼んだ。

奈良時代後期から、律令制度に伴って公家と庶民を分けるため、公家は手足が隠れる服を着用し、庶民は動きやすい服を着るようになった。この頃まで前打ち合わせは着やすいように左右どちらでもよかったものを「右前」とした。さらにこの時代には染

めや織りの技術も発達し、鮮やかな色や柄のきものが着られるようになった。

平安時代はまだ麻布が中心に着られていた。この時代は色によって階級を表すようになった。色を重ねる「かさね」が発達し、季節の色を先取りする色調など、現代に通じる色合わせが作られた。十二単衣もこの時代のものである。

鎌倉時代から室



図1 きものの変遷 (1)

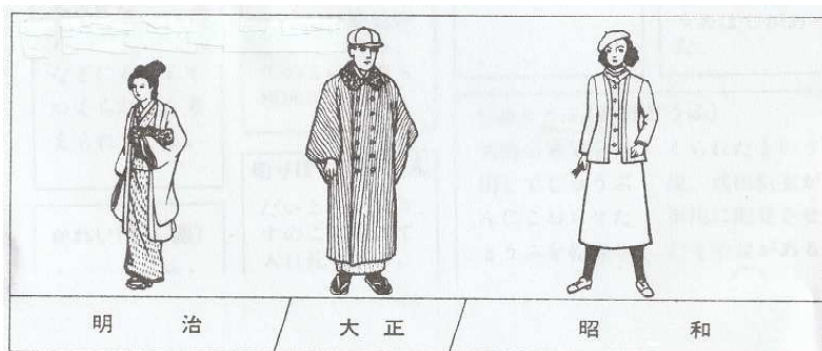


図2 きものの変遷 (2)

町時代にかけては華やかなきものが着られ、筒袖のきものが現れた。武士は大将の個性を出すようになり、模様や色などが発達した。

江戸時代は^{かみしも}袴が藩の制服となり、藩ごとに模様が決まっていた。これによって、藩ではきものの染めや織りなどの技術の向上につとめた。

明治時代になり西洋化が進むと、正式な場では「洋服」を着用することが決められた。庶民は紋を入れた「紋服」が礼装となった。

戦後、動きやすさ、着やすさ、手入れのしやすさなどから洋服の着用が中心となり、きものが着られる場合は、晴れ着、改まった場、セレモニー服としての着用が中心となり、婚礼衣装、葬式の喪服、卒業式、成人式、七五三などの限られた場での着用となっている。

(1) 右前

奈良時代までのきものの着かたは、自分が着やすいように左右どちらを前に着てもよかったが、律令制度の確立により、719年の「衣服令」という法令により、庶民の誰もが右を前に着ることが定められた。初令天下百姓右襟と言われている。これは利き腕が動かしやすく、日常の動きに合っているからという理由だったようだ。

右前は、自分から見たときは右襟が先からだ側につく。つまり、右手前である。相手から見ると右の襟が前になって「y」に見える。こうすると右手を襟元に入れやすい。

(2) 裁ち方

袖	袖	身ごろ	身ごろ	おくみ	おくみ
				台襟	掛け衿

図3 きものの裁ち方

きものは、決められた幅(1尺：約36cm)の長さが約12メートルほどの布を決まった寸法で切る。型紙などはなく、袖2枚、身ごろ(後ろ身ごろと前身ごろはつながっている)2枚、おくみ(前身ごろの重なり)2枚と台襟、掛け衿の合わせて8枚で作られる。

着丈は自分の身長とほぼ同じ長さにして、肩から着たときに長い分(頭の大きさ分)はおはしりとして着る。身幅はほとんど変えることなく同じに作るが、打ち合わせの分量で調節して同じ着物を誰でも着られるように作られている。

男ものは「ついたけ」と呼ばれる仕立てかたをする。着たときにちょうどよい長さで作られているので、おはしりはない。

(3) 帯

きものに合わせた帯は、きものが着崩れないように留める役目を持つが、その他に装飾の意味も持つ。きものは先染めの紬や銘仙のほうが庶民的で、染めのほうが格が高いとされる。しかし、帯は織りのもののほうが格が高いものもある(つづれ織り、西陣織、博多織りなど)。きものが派手なときは、帯をやや地味な色にして合わせる

と落ち着いて見え、逆に地味なきものでは派手な帯を合わせるとよい。季節の色を先取りしたり、柄を先取りしたりすると、季節感あふれる組み合わせとなって、周囲を楽しませることができる。帯は装飾の意味も大きい。

表も裏も柄が同じにできているものは「丸帯」と言う。模様を作るために沢山の糸が使われているので、大変重い。明治、大正時代の婚礼衣装は丸帯が使われていた。そこで、裏は模様をなくして作ったのが「袋帯」である。現在、礼服に使われているのはほとんどがこの袋帯である。

袋帯よりさらに長さを短くして帯結びをしやすくしたものが「名古屋帯」である。長さは袋帯が4.3m 以上あるのに対して、名古屋帯は3.6m である。長さの半分の幅半分にしてかがってある。袋帯の二重太鼓を一重でお太鼓を結べるように短く作った。名古屋で考案されたので、「名古屋帯」と呼ばれた。

浴衣では帯の幅が半分の「半幅帯」を使う。これは幅が狭い分扱いやすく、帯枕、帯揚げ、帯締めを使わなくても簡単に結ぶことができる。

(4) 着付けのための小物類

○帯枕

帯結びのお太鼓の丸みとふくらみをつくるのに使われる。

○帯揚げ

帯枕と仮紐を隠す。帯の上端を装飾する。全体のコーディネートを引き締める。

○帯締め

帯結びの留めとなる。色の組み合わせによって華やかさを増し、きもの全体のまとまりをつくる。

…2 きものの形

○小袖

ふだん着られているきものは「小袖」と言う。小袖は十二単衣などのきもの下に着るきものとして発達した。鎌倉時代以降は表着として着用された。江戸時代に庶民が動きやすさの面からふだん着に着用され、現代のきものの形になった。

○振り袖

成人式でおなじみの振り袖であるが、一般的に見られるのは中振り袖で、さらに大きな袖の本振り袖は一部の婚礼衣装に見られるだけである。

○羽織

男ものでは「紋」のついた羽織、袴姿が第一礼装である。ふだん着に着用する羽織や防寒のために着用するものもある。

女性用では黒地に紋をつけたものも見られた。外出の際に上着として着用されるが、室内で着用してよい。

○袴

男ものは股が分かれている馬乗り袴である。

女ものはスカート型のあんどん袴である。

袴は平安時代に十二単衣の下着として緋色の袴を着用し、貴族の下着であった。鎌倉時代には着用がなくなったが、江戸時代に宮中の女官の働き時の服装として着用された。

明治時代になると、女性の社会進出により、女性が男袴を着用した。女学校が設立され、制服としてえび茶袴(あんどん型)が採用された。

第二次世界大戦後は多くがセーラー服となり、袴の着用はなくなった。現在は卒業式に着用される。

●きものの名称

・留め袖

ミセスの第一礼装で、黒地に5つ紋、裾に模様が入っている。色地きものに紋を付け、裾に模様がある、色留め袖は黒留め袖に次ぐ礼装である。

・訪問着

裾の模様が前身ごろから後ろ身ごろにつながっている。3つ紋または1つ紋である。紋のついていないものもある。

・付下げ

裾の模様が前と後ろでつながっていない。柄が一方方向で、経^たて方向がはっきりわかる。

・小紋

小さな柄のものが多く、逆さになってもよいような柄ゆきになっている。

…3 きものを作る生地

(1)織りと染め

きものは形が決まっているので、布地に変化をつけることでオシャレを楽しむ。

江戸時代に袴が藩の制服と決められたことから、藩士は自分の地域の染めや織りを大事にしたので、日本各地に染めや織りが発達した。

紬は日本各地にある。紬は「生糸」を作るよい繭ではなく、いわゆるくず繭を使って、短い糸をつなぎ合わせて糸を作った。つなぎ合わせた糸から作られたことから、「つむぐ」「つむぎ」と呼ばれた。結城紬や大島紬などは糸を先に染めてから織る織物である。糸を染めたもので織っているため、裏表とも同じ柄でできている関係から、しばらく着た後、裏と表を返して縫って着ることができる。

染めは、白糸(生糸)で織った白生地に手書きで絵を描く友禅染めや、型紙を使って色を染める江戸小紋などがある。さらに、手で刺繍を施したものなどがあり、大変豪華な模様のきものができる。

きものは織りのものより、染めのほうが格が高いと言われている。

(2)きものを作る素材

○絹

カイコの繭からとった動物性繊維で、天然繊維としては珍しい長繊維(1,000m ～ 2,000m)である。

絹の生産は紀元前3,000年頃から中国で始まった。前漢の時代には蚕室で湿室、天卵の保管が確立していた。6世紀頃に現在の養蚕原理がほぼ確立していた。

養蚕や絹の生産は中国から他の地域には伝わらず、絹織物が中国から陸路や海路でインドやペルシャに輸出された。これがシルクロードの始まりである。紀元前1世紀頃の古代エジプト遺跡からも発見されている。ローマでも上流階級の衣服として好まれ、絹の貿易を求めてインドに進出した。さらに、中国に絹を求め、金と同量の価値があるとされた。

日本には弥生時代に伝わった。律令制のもとでは、納税のために絹織物の生産が盛んになった。しかし、品質は中国のものには及ばなかった。そのため、貴族階級は中国の絹を珍重した。

明の時代に貿易が禁止されたが、ポルトガルなどが仲介した。戦乱によって絹の質が低下したため、西陣や博多でも中国の絹を求めた。

江戸時代には蚕種保存のため、結城藩を天領化した。生産条件のよい仙台藩、尾張藩、加賀藩や上野国、信濃国などが養蚕を進め、絹織物を作った。8代将軍が天領にかかわらず全国に広めたことから、江戸中期には品質が向上した。

明治時代以降、日本の近代化を進めるうえで絹織物は大きな基幹産業であった。富岡製糸場の設立により、絹の生産量は「清」を抜いて世界一となった。世界恐慌により生糸の価格が暴落し、絹織物も下火になり、第二次世界大戦で絹の流通が途絶えた。これによってヨーロッパでは絹に代わる化学繊維の発展につながった。

○綿

奈良時代に中国から三河に伝わったと言われているが、栽培に適さず、途絶えた。本格的な栽培は室町時代から戦国時代(15～16世紀)だと言われている。

一般庶民が着られるようになったのは江戸時代からで、それ以前は麻が中心だった。寒い時期でも麻を着用していたので、たまに「褒美」としてもらえることがあると「天恩」をなすとして、大変喜ばれた。また、大変貴重であった。

綿は加工がしやすく、麻に比べると暖かい。藍に染まる性質を持っている。綿花は種を包む繊維から作る。花の姿から綿花という。真綿は絹から作られている。会津木綿、三河木綿、遠州木綿、伊勢織物、播州織りなどが代表的なものである。久留米絣は先染めで織りによって柄が作られている。

江戸時代には、糸が作りやすいこと、生地に作りやすいこと、きものに仕立てやすいこと、保温性のよさから広まった。織りと染めの技術が発達し、庶民のきものとなった。ふとんに綿を入れたりするようになった。綿入れ半纏もこの頃から作られるようになった。明治時代には機械織りも発達した。豊田織機が設立されたのはこの時代である。

綿は乾燥と湿潤な期間があるとよいとされるが、日本は湿潤期が多く、機械織りに不向きだったことから、徐々に栽培されなくなった。

ヨーロッパでは羊毛が中心に使われていたのに、インドでは「木の上に羊がなっている」と考えられていた。

○麻

人類最古の繊維植物とされる。縄文時代から衣類や縄、神道に使われていた。中国からメソポタミア、地中海、古代エジプト、ギリシャ、ローマと伝わったとされる。船の帆や衣類に使われた。とても丈夫で、水に濡れるとさらに強くなる。軍事、貿易に役立ち、重宝された。

日本では、飛鳥時代、大化の改新で租庸調の税制のもと、麻が調として財源となった。大麻(ヘンプ)、亜麻(リネン)、苧麻(からむし)(ラミー)が多く使われている。日本では、大麻と苧麻が栽培された。

鎌倉時代に晒しの技術が開発された。日常のきものの他に、上等品や献上品となった。越後上布は最上級品とされる。苧麻の繊維を糸にして織ったものである。

江戸時代には袷に使われた。白く上等なものは奈良晒である。染めに強い。麻は手間いらず、肥料いらずでよく育つ。種から油をとり、カスを肥料に、茎から糸を作り出す優れたもので、神からの贈り物と言われた。小千谷縮は高級織物として知られている。

大麻の取り締まりにより栽培が衰退した。

○羊毛

紀元前2,000年頃、メソポタミアで使われていた。紀元12世紀、スペインに渡り、メリノウールとして使われた。イギリスの産業革命によって一般に広まった。それまで王侯貴族の着る服に使われていた。産業革命以後、オーストラリアへ伝わった。

日本では、家畜化するのが難しかった。明治に入ってから輸入品が増加した。羊毛を輸入して上等な織物を作り、製品とした。

ウールは繊維の表面のスケールがウロコ状になっている。毛に保温性があり、水をはじく一方、水分を吸収する。火に晒されると焦げるが、燃え上がらないため、江戸時代の火消しの衣類に使われていた。伸び縮みもよい。

絹が高価で手に入れにくかったため、昭和30年代にウールのきものが流行った。

…4 まとめに代えて

「動きづらい」という難点のため、ふだん着での着用がなくなったきものであるが、婚礼や成人式などの限られた場で着られる姿を目にするだけとなった。しかし、きものの持つ魅力はとても大きい。きものを作る生地は絹であり、その「織り」や「染め」に大きな魅力がある。日本各地に地域の織物や染め物が発達し、日本の伝統として受け継がれている。

明治時代初期に西洋文化が入って洋服が着られるようになり、きものの着用範囲が狭められたが、明治時代後期から大正時代には洋服の柄を取り入れた華やかなきものが流行った。第二次世界大戦による物不足によって、きものは大きく形を変えた。もんぺと上着の二部式、おはしりをなくして使う布地を少なくしたものなどが現れた。

戦後、女性の社会進出がさらに進み、働く場では動きやすい洋服が着用された。また、女学校の制服もきものからセーラー服、ブレザー型へと変わってきた。しかし、女性の外出着としても、きものの着用は続いていた。七五三、子どもの入学式や卒業式、冠婚葬祭の参列などは、きものものが中心だった。大正時代からのきものが、母親から娘、孫へと受け継がれたからである。そして、きものを着る技術やきものを作る技術（和裁）を学ぶ場、学ぶ機会が多かったからだ。

戦後生まれが大人になった昭和40年代以降は、日常の外出着としてきものを着る人が少なくなった。冠婚葬祭や卒業式などの儀式の場での着用のみが多くなった。この頃には、留め袖や訪問着、小紋、付下げというきものを所持している人は多く、和筆箆を持つ人も多かった。茶道や華道などを習う人が着用する他、高齢者ではきものがふだんの外出時にも着用されていた。

平成、令和と時代が進むにつれ、日常的にきものを着る人はほとんど見られなくなった。きものの着付けをわざわざ習わなければ自分で着られなくなったからである。と言っても、母から娘への受け継ぎは続き、筆箆の中には留め袖や訪問着がしまわれている。着用にはお金をかけて着付けをしてもらわなければならない。また、きものは伝統技術を受け継ぐものが多く、値段が高く手軽に手にすることが難しいものになっている。

一方で、日本の伝統文化として大事にしなければならない意識と民族服としての価値を持ってきものを大事にしたいという意識も高い。子どもの成長を願う七五三では、和服を利用することが多く、一緒に収まる写真には母親も和服を着用することが多い。手軽に着用できるきものは夏の浴衣である。そして、祭りの際に着用する半纏や法被がある。これらは身近な場で目にするきものである。成人式では和服姿が大変多く見られる。2020年からのコロナ禍では、冠婚葬祭の参列が縮小され、式そのものも簡素化されたこともあり、最近では婚礼での和服姿が少なくなっている。また、葬儀の参列者にも和服の喪服着用者がほとんど見られなくなった。最近よく話題になる和服姿には、小学生の卒業式での袴姿や観光地での外国人の和服姿である。小学校の卒業式では、華美にならないように袴の着用を禁止するところも現れたと聞く。観光地では、浅草をはじめ、川越や京都などで外国人に着付けのサービスをするところがある。日本の古くからある絹のきものではなく、汚れてもすぐ洗える化学繊維を使ったものがほとんどである。また、着付けをしても苦しくないように、おはしよりをなくしたものの、洋服の雰囲気を持たせたレース使いのものなど、手軽に利用できるようにしている。

きものは直線裁ちである、手縫いでつくる、裏表同じ柄で作られているものが多いことから、簡単に縫い直しができ、たたみ方も簡単である。サイズがなく、個人の体型に合わせて着付けができるなどの利点もあるが、日常着としての利用が難しい。

伝統文化とそれに関わる伝統的な技術の継承をしていかなければいけないと感じている。母から譲り受けたきものを筆箆に眠らせたままにせず、外の風をあててみよう
(産業教育研究連盟常任委員)

第75次(2026年)技術教育・家庭科教育全国研究会

主催：産業教育研究連盟

産業教育研究連盟(産教連)では、「現行の学習指導要領で謳われているような、社会的な課題解決を優先する学習ではなく、その基盤となる普遍的原理を大切に学習に時間を十分かけることこそ、確かな学力形成につながるのだ」ということを提唱してきました。

今回の研究会では、この「普遍的原理を大切にする」には、具体的にどのような学習内容にするのがよいのか、また、子どもが学んだことを他に転移・発展させることにつながるのか、75年にわたる産教連の研究活動の総括と絡めながら検討してみたいと思います。

研究会テーマ 今こそ引き継ぎたい普遍的原理に基づく学習

日程・時程 2026年8月1日(土)～8月2日(日)

日 時	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
8/1(土)					受付	基調提案と それに対する討議	授業づくりの視点Ⅰ ー理論と実践			連盟総会Ⅰ
8/2(日)		受付	授業づくりの視点Ⅱ ー理論と実践	連盟総会Ⅱ						

会場 東京都教職員組合北多摩西支部北多摩西教育会館

〒185-0034 東京都国分寺市光町1-40-12
TEL 042-576-1161

交通

JR 中央線国立駅下車(会場まで徒歩約8分)

特別快速(特快)は止まりませんのでご注意ください。
また、駐車場はありません。

参加費 会員・学生 2,000円 一般3,000円

申し込み

産業教育研究連盟(産教連)の Web ページ
(<http://www.sankyoren.com>)から行います。
6月1日(月)から受付を開始しています。

◆当日、現地での参加申し込みも可能です。

申込受付期間：6月1日(月)～7月27日(月)

詳細は申し込みのページをご覧ください。



プログラム

<8月1日(土)>

12:30～ 受付

13:00～14:30 基調提案とそれに対する討議
—普遍的原理を大切にした「技術・家庭科」の体系と「情報・技術科(仮称)」

<休憩>

14:40～17:00 授業づくりの視点Ⅰ—理論と実践

- ① AI を使った授業の是非
- ② エネルギー変換
- ③ きものあれこれ
- ④ 参加者からのレポート発表

17:00～19:00 産教連の活動の総括(連盟総会Ⅰ)
資料をもとに、75年にわたる産教連の研究活動を振り返り、その足跡をたどります。

<8月2日(日)>

9:00～ 受付

9:30～11:00 授業づくりの視点Ⅱ—理論と実践

- ① 材料(金属)加工、キーホルダーの製作など
- ② 食農関連—自動調理器の考察と家庭科教育
- ③ 参加者からのレポート発表

11:00～12:30 産教連の活動の総括と今後(連盟総会Ⅱ)

過去1年間の活動報告と前年度の会計決算報告を行い、次年度の会計予算案の検討を行うとともに、今後の活動について確認をします。

参加者が持参したレポートについては、「参加者からのレポート発表」の場で行います。レポートは大歓迎ですので、皆さんの授業実践などのレポートをご持参ください。また、自作の教材・教具や授業アイデアなども、この場で紹介できます。

なお、資料は「参加者数+5」部をご用意ください。参加者数は産教連のホームページで確認することができます。

産業教育研究連盟(略称、産教連)は、技術教育・家庭科教育に関わりのある小・中・高・大学の教員や学生などで運営している民間教育研究団体です。ホームページで日常の活動を公開しています。

職業教育研究会は1949年2月に発足し、1954年9月に産業教育研究連盟と改称し、今日に至っています。その間、1952年から、毎年、研究大会を開いています。現在は研究会という名称になっています。第1次からの研究大会の開催年月日・開催地・大会テーマ等が「技術教室」の1994年3月号(No. 500)に掲載されています。

また、第60次までの研究大会の報告について、「技術教室」11月号(2010年は12月号)に掲載されています。「技術教室」誌の内容は産業教育研究連盟(産教連)ホームページから見ることもできます。

参加者へのお願い

1. **宿泊が必要な方は各自で宿泊施設の予約**をお願いします(JR 中央線沿線には宿泊施設がたくさんあります)。また、**食事は会場周辺の飲食店利用**となりますので、各自でお願いします。
2. 誰でも自由に発表し、討議に参加できます。実践報告、教材教具やテスト問題の紹介など、多様な提案や資料の提供をお願いします。**資料は「参加者数+5」部を準備し、事前の送付**にご協力ください。
3. レポート類や教材教具などの荷物の送付は、**8月1日(土)の午前中必着**で、
**〒185-0034 東京都国分寺市光町1-40-12 東京都教職員組合北多摩西支部北多摩西教育会館
産業教育研究連盟 研究会実行委員会 宛**
をお願いします。
4. キャンセルまたは変更の場合には、必ず事務局(研究会会計)の野本までご連絡ください。
5. キャンセル時の参加費の返金は、資料の発送をもって代えさせていただきます。
6. 申し込みをされた方の氏名・住所などの個人情報^{さんきょうれん}は産業教育研究連盟の活動以外には一切使用しません。

問い合わせ先

事務局 野本勇 〒224-0006 横浜市都筑区荏田東4-37-21 TEL 045-942-0930
mail:isa05nomoto@snow.plala.or.jp

申込方法

参加費

会員と学生 2,000円 一般 3,000円

申込み

産教連 Web ページ <http://www.sankyoren.com> からお申し込みのうえ、参加費を7月27日(月)までにお振り込みください。郵送による参加申込みの場合も同じです。なお、郵送による参加申込みの場合には、下記の参加申込書を事務局へ郵送してください。(7月27日(月)必着)

振込先

三菱 UFJ 銀行^{こうほく} 港北ニュータウン支店 普通0605258「産教連^{さんきょうれん} 全国研究大会」
事務局 野本勇 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21 TEL045(942)0930

----- 切 取 線 -----

第75次(2026年)技術教育・家庭科教育全国研究会 参加申込書

(郵送および当日申込用)

氏 名

住 所(都道府県名から記入) 〒

連 絡 先 電 話 () E-mail:

所 属(勤務先)

◆参加日と参加費に○印をつけてください。

参加日: 8/1(土) 8/2(日) 参加費: 会員と学生 2000円 一般 3000円

◆レポートの有無に○印をつけてください。

レポート: 有り 無し

初代委員長清原道壽さんのこと

—足跡と重ね合わせて—

■ 池田種生さんと清原道壽さんの二人三脚



写真1 池田種生(1897～1974)



写真2 清原道壽(1910～2002)

産業教育研究連盟の前身は職業教育研究会である。生みの親は池田種生(写真1)さんと清原道壽(写真2)さんと、創立時の代表は清原さんである。機関誌を1949年5月に創刊している。誌名は「職業と教育」である。年会費 240円を納めた会員に配付していた。制作費は主として会費で賄ったが、それだけでは足りなかったため、「職業科文庫」を出版し、その印税で補填することを計画した。機関誌は文庫の宣伝も兼ねていたが、肝腎の文庫の原稿が集まらず、当初予定の50点に届かないうちに計画が頓挫したという(「職業科文庫」1949年4月号～1950年4月号 11点 第一出版)。

その後、教科書(『職業』光書房 1950年、『職業家庭科』立川図書¹⁾ 1951年、『職業・家庭科の展望』産教連編、立川図書 1955年)などを編集・出版して印税収入を機関誌刊行の経費に充てたが、それでも足りなかった。会員は800名、月20円の会費で、収入は月16,000円だったので、月2～3万円の出版経費を賄い切れず、経費の一部を清原さんが補填していたという。1957年頃から、清原さんは何とかしなければと思った。

■ 機関誌「技術教育」発行に奔走した清原さん

最初、清原さんは福村出版へ雑誌発行の話を持っていたが、断われたそうである。困った清原さんは、当時『職業科指導事典』(産教連編 国土社 1956年)を出版し、その売れ行きもよかった国土社にお願いした。国土社は、1937年に厚徳書院として創業し、仏典中の「心浄ければ、国土また浄し」(維摩経典)より1946年に名称変更し、1948年に「株式会社 国土社」に改組している。月刊誌「教育」(教科研：教育科学研究会)、「数学教室」(数教協：数学教育協議会)などの発行や、児童図書、教育図書を手掛け、民間教育研究運動との相性もよかった。雑誌ばかりでなく、子ども向けの本も作っていこうという話になったという。

1959年4月、国土社を発売元に、月刊機関誌「技術教育」(A5判)と誌名を変更して再スタートした。国土社の編集担当者は酒井忠美さんであった。「教育と産業」を改題し、書店店頭で販売された「技術教育」第1号は定価80円、1959年5月号(図1)であった。清原さんは自ら、技術教師のための教養講座として「転換期にたつアメリカの技術教育Ⅰ」を書かれて、普通教育における技術教育、つまり一般教養としての技術教育——インダストリアル・アーツ——の大切さを読者に訴えている。編集後記には、「……第1号をおくります。「技術教育」の編集方針として、実践上の問題解明と理論化、理論の実践化ということに主点をおいていきたいと思ひます。さしあたり、本号では「学習指導の急所」というのが、その結び目にあたるものでしょう。「海外資料」も、具体的な実践例をとおして、理論の実践化

への示唆をふくんでいと思ひます。……会員であつた方がた、新しく読者となられる方がたからの積極的な意見提示や反論などをまっています。百家争鳴はやがて大きな力を生み出す前提でしょう」と清原さんは書いています。

時あたかも1957年10月4日、ソ連が人類初の人工衛星「スプートニク1号」を打ち上げ、続いて11月3日にはライカ犬を乗せた「スプートニク2号」の打ち上げに成功した。中学生であつた筆者には、アメリカよりソ連が科学・技術が進んでいるのかと思はされる衝撃的な出来事だった。

■「技術教育」存続のため発行した「入門技術シリーズ」

清原さんは、機関誌のみでは国土社にメリット(経済効果)がないので、副産物の刊行で協力しようと思つたようだ。そのため、「技術教育」の発行と併行して「入門技術シリーズ」全7巻、『図解技術科全集』全9巻別巻(清原道寿編 国土社 1965～1972年)を刊行した。大変な労力を要したと推察できる。

「入門技術シリーズ」全7巻(清原道寿監修 国土社 1959年)

- ① 木工技術の初歩 山岡利厚著 信州大学附属中学校教諭 1959年
- ② 金工技術の初歩 村田憲治著 東京都立烏山工業高校教諭 1959年
- ③ 原動機技術の初歩 真保吾一著 東京学芸大学教授 1959年
- ④ 電気技術の初歩 馬場秀三郎著 東京工業大学附属工業高校教諭 1959年
- ⑤ ラジオ技術の初歩 稲田茂著 東京工業大学附属工業高校教諭 1959年

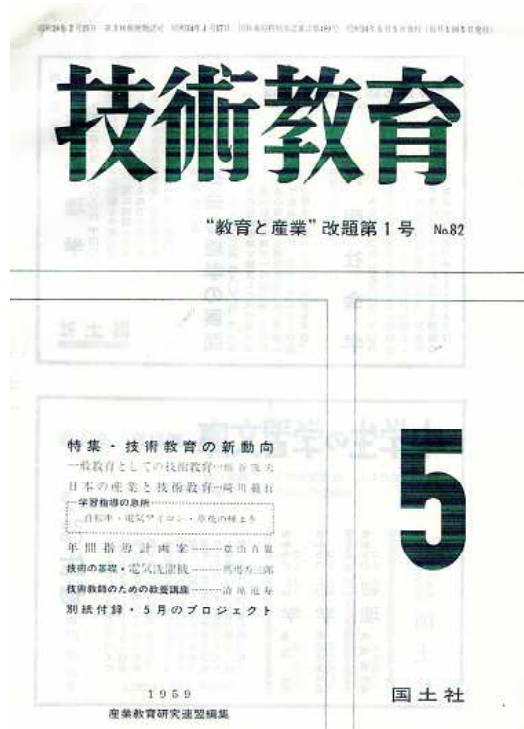


図1「技術教育」第1号の表紙

⑥ テレビ技術の初歩 小林正明著 ラジオ東京テレビジョン放送局テレビ技術部1959年

⑦ 製図技術の初歩 川畑一著 東京都立北豊島工業学校教諭 1959年

さらに、子ども向けの本として『図解技術科全集』（清原道壽監修）全9巻別巻1巻を発行した。第1回配本は②であった。

① 図解製図技術 杉田正雄（川崎工業高校）1965年

② 図解木工技術 真篠邦雄（長野県教育委員会指導主事）1965年

③ 図解金工技術Ⅰ 塑性加工 仲道俊哉（大分市判田中学校）1971年

④ 図解金工技術Ⅱ 切削加工 小池清吾（岡谷市北部中学校）・仲道俊哉・松岡金三（長野県下伊那郡高森南中学校）・山岡利厚（諏訪市上諏訪中学校）1972年

⑤ 図解機械技術Ⅰ 機械のしくみ 片岡勝彦（長野県埴科郡戸倉上山田中学校）・小島晴善（長野県上伊那郡長谷中学校）1965年

⑥ 図解機械技術Ⅱ 内燃機関のしくみ 田口直衛（長野市柳町中学校）1968年

⑦ 図解電気技術 向山玉雄（東京都葛飾区堀切中学校）・稲田茂（東京工業大学附属工業高校）1965年

⑧ 図解電子技術 松田久志（東京都立港工業高校）・稲田茂 1965年

⑨ 図解総合学習 佐藤禎一（武蔵野市武蔵野第五中学校）・牧島高夫（飯田市飯田東中学校）・山岡利厚・小池清吾・伊藤禎一（長野県諏訪郡富士見南中学校）1965年

⑩ 別巻 技術科製作図集 図面と作り方 伊藤禎一・戸谷上（長野県更級郡川中島中学校）1965年

そして、現代技術入門全集（清原道壽監修）全12巻（1968～1969）も刊行している。

① 製図技術入門 丸田良平（長野県小布施町立小布施中学校）1968年

② 木工技術入門 山岡利厚（長野県教育センター）1968年

③ 手工具技術入門〈金工Ⅰ〉村田昭治（東京都杉並区立西宮中学校）1968年

④ 工作機械技術入門〈金工Ⅱ〉北村碩男（長野県佐久市立浅間中学校）1969年

⑤ 家庭工作技術入門 佐藤禎一（東京都調布市立第五中学校）1969年

⑥ 家庭機械技術入門 小池一清（東京都八王子市立八王子中学校）1969年

⑦ 自動車技術入門 北沢競（信州大学教育学部）1969年

⑧ 電気技術入門 横田邦男（長野県教育センター）1968年

⑨ 家庭電気技術入門 向山玉雄（東京都葛飾区立堀切中学校）1968年

⑩ ラジオ技術入門 稲田茂（東京工業大学附属工業高校）1969年

⑪ テレビ技術入門 小林正明（東京エレクトロン研究所）1969年

⑫ 電子計算機技術入門 北島敬己（東京都立荒川工業高校）1969年

また、全国大会とは別に、1961年、第1回「技術科夏期大学講座」を東海大学で開催した。参加者は200名。技術科教師の基礎教養と運動の拡大を目標にしたものだった。以降、第9回、1969年まで夏に開催している。

単行本としては、1963年に『技術科大事典』（産教連編 国土社）、1966年に『技術科の指導計画』（産教連編 国土社）、1968年に『技術・家庭科教育の創造』（産教連編

国土社)、1969年に『技術・家庭科の指導計画』(産教連編 国土社)を刊行している。これらの書籍で産教連の技術教育・家庭科教育に対する基本的な考え方をまとめている。1963年頃から10年間くらいが、民間教育研究団体の高揚期であった。

1977年10月頃、国土社から、部数の減少を理由に、1978年3月号で発売を打ち切りたい旨の通告があった。

■ 「技術教育」が民衆社に、そして農山漁村文化協会に

産教連と民衆社との関わりは、池上正道さんと民衆社の澤田明治社長の交流からという。当時、中学生が満足にナイフで鉛筆を削れない、靴の紐を結べないことが話題になった。これは単に子どもの「器用・不器用」の問題ではなく、「思考力」「知恵」の問題としてとらえ、「手・労働・技術」の教育が不可欠であることを現場の声としてまとめ、1975年8月に産教連編で『子どもの発達と労働の役割』を民衆社から出版した。

機関誌が国土社から離れて、どこも引き受ける出版社がなかった。1978年3月号の打ち切りが刻々と近づいたとき、澤田社長が4月号から発行元を引き受けると約束してくださり、1978年4月号から雑誌を出していただくことになった。3号分だけ判型はB5判で、7月号よりA5判になった。そして、1978年7月号から書名を「技術教室」に変えた。雑誌「技術教育」の商標登録を持つという人物から民衆社に連絡があり、「技術教育」の名を使うなら、雑誌名を使う権利を買ってほしいという話があった。常任委員会で検討の結果、この申し出を断って、書名を「技術教室」に変えることにした。

1985年から、向山玉雄さんが中心になって、産教連企画、向山玉雄・諏訪義英編で、「楽しい手作り教室」シリーズを始めた。このシリーズの本は、一般書店ばかりでなく、日曜大工店といわれる東急ハンズでも販売され、評判になった。澤田社長には、雑誌はあまり伸びなかったが、単行本が売れて、とても喜んでいただいた。

しかし、民衆社から編集の手が足りなくなったとの理由で、1993年3月号で雑誌の発売元を返上したいという通告があった。15年間、お世話になった。

筆者は1974年1月、産教連に入会し、機関誌の編集部には1978年から加わるようになった。最初に、雑誌の広告をとることに興味をもった。少なくない出版社を訪れて、個人的にたくさんの方と知り合いになった。

一方で、機関誌の発売元を引き受けてもらえる出版社を探す課題もあった。機関誌の発売元は比較的実績のある出版社を探した。結論として、大月書店と農山漁村文化協会(以下、農文協)にあたることにした。常任委員は大月書店の名は知っていたが、農文協の名はほとんど知られていなかった。筆者は農文協のことを紹介し、常任委員会で第一候補を農文協にし、筆者がメッセンジャーとして農文協にあたることになった。農文協に機関誌の発売元を引き受けていただいたことは先述したので、割愛する。

■ 清原道壽さんの生い立ち

(1) 小学生で僧の資格を取得

清原道壽さんは、1910(明治43)年、大逆事件の年に福岡県浮羽郡椿子村(現在の浮

羽町)の光教寺(真宗大谷派)の次男として生まれる。兄と姉がひとりずつ、弟と妹がふたりずつの7人兄弟の次男であった。小学生になると経を習い、2年生のとき、東本願寺久留米教務所で「得度習礼」に合格し、京都の東本願寺で行われた得度を受け、その後各種の試験を受けて、僧の資格を取ったという。

光教寺は郡内で最も古く、檀家が千軒ほどあったという。夏の盆経の檀家まわりが忙しく、道壽さんも檀家でお経をあげた。檀家では道壽さんが小さいので吃驚したが、寺の息子が来てくれたと歓迎されたという。

(2) 第七高等学校の学び

第七高等学校(鹿児島)に進学し、学生生活を送っていたが、3年生になると、友人たちと『賃労働と資本』(マルクス)の読書会を始めた。マルクスに特別興味を持ったわけではなく、ドイツ語の勉強のためだった。辞書を片手に訳し、仲間と議論し、中味が少しずつわかるにつれて、内容に引き付けられた。どうしたら、貧しさのない世の中に変えていけるのだろうか、真剣に論議をした。次のテキストは『フォイエルバッハ論』(エンゲルス編)である。ドイツ語で読んでみると、この著の付録として載っているマルクスのフォイエルバッハに関するテーゼの最後の三行に引き寄せられた。

「哲学者たちは、世界をさまざまに解釈してきた。肝腎なのは世界を変革することである」(Die Philosophen haben die Welt nur verschieden interpretiert; es kommt aber darauf an, sie zu verändern.)。なるほど、清原は膝をたたいた。「哲学者」を「教育者」に置き換えてみよう。教育なら自分でもやれそうだ。

哲学史の授業で新カント学派とマルキシズムについての講義も受けた。清原さんは自分の考えが間違っているか否かを確かめるために、ドイツ語教師の飯島道脩²⁾に相談した。道脩は、平塚らいてうの従兄でドイツに留学し、特にフリードリッヒ・フォン・シラーに造詣が深く、思索に富んだ講義が印象的だったという。相談にのった飯島講師は「ナトルプ³⁾を勉強するのはいいだろう。そのためには、まずカントの『実践理性批判』⁴⁾を読みなさい。それも本気で読まなければいけないよ」。自分の考えが間違っていなかったことを確認し、飯島のアドバイスを受け入れ、そのことは後の生き方に大きな影響を与えたのである。

(3) 大学時代の生活

1931(昭和6)年、東京帝国大学文学部教育学科へ入学した。授業が始まって1か月が過ぎると、おもしろくない講義を欠席して、七高時代に薦められたカントの『実践理性批判』を読むことにした。洋書専門の本屋で原書を買ひ、図書館にこもった。わからない言葉を辞書で調べ、意味を考え、そして内容に関連した書籍を読む。ノートに克明に記録する。1日に1ページも進まないこともあったという。息抜きに東大構内の三四郎池に行き、景石に座りながら、思索にふけた。また、夜、図書館が閉まると、原著の一節を、空に向かって口ずさみながら下宿に戻った。

翌年4月から1年間休学をしている。父親が病で倒れ、代わりに寺務をすることになったからだ。その間、京都帝国大学文学部哲学科で学んでいる兄の章通さんから「胸

が悪い」という連絡があり、11月半ばに京都に様子を見に行った。結核であったが、それほど重くはなく、兄の卒論の手伝いをしながら、京大で文学部の講義を聞いた。哲学概説、カント哲学、心理学……。どの講義も魅力的だった。特に清原さんの専門である教育学では、ペスタロッチの生涯を紹介する小西重直教授の講義に引き込まれた。そして、彼の温厚で誠実な人柄と教育者としての姿勢、さらに大学自治や学問の自由を重んじる態度に魅了された。筆者が想像するに、小西教授はペスタロッチの有名な名言、「玉座にあっても、木の葉の屋根の陰に住んでいても、すべて同じ人間である」(『隠者の夕暮れ』)を引用したり、他の名言「忍耐力を持たなければならないようでは、教育者として落第である。愛情と歓びを持たねばならない」「人を満足させるには、大変な学問が必要だが、ワインなら少しで済む」「太陽には太陽の輝きがあり、月には月の、そして星々には星々の明るさがある」などを紹介し、学生の琴線に触れたのであろう。

1933(昭和8)年の秋、清原さんが2年生のとき、東大の学内でセツルメントの「セツラー募集」の張り紙を見た。折しも小西教授が京大総長の時に起きた「滝川事件」(1933(昭和8)年10月)⁵⁾がセツルメント⁶⁾入りに決意させるきっかけになったのであった。

(4) 旧友たちと禁断書『共産党宣言』などを読む

京都にいるとき、清原さんは七高から京都大学に進学した2人の友人と会った。3人で数回、顔を合わせるうちに、誰からともなく「読書会をやろう」ということになった。「マルクスはどうだ」「やるなら、本気でやろう」「最初は、『共産党宣言』がいい」「だけど、手に入るか? 発禁本だぞ」。大学の消費組合の職員の協力で、発禁本を手に入れた。読書会の場所は、友人のひとりが林丘寺境内のあばら家を借りていた。ここは宮内省管轄で、治外法権になっている。「ヨーロッパに幽霊が出る。一共产主義という幽霊である。古いヨーロッパのすべての強国は……」ここで、『共産党宣言』の読書会が始まったのである。そして、『資本論』、『国家と革命』と続く。議論が熱中すると、深夜になる。林丘寺から出てくる学生3人を咎める人物はいなかった。特高警察はもっと大物を狙っていた。

(5) 父に進路のことを恐る恐る話すが杞憂だった

休暇で帰郷したとき、教育実践を父に報告した。父は目を輝かして聞いてくれ、「よい教育が大事だ、よい教育が大事だ」と繰り返し言ってくれたという。

大学を出て小学校の教員になることを報告する際、「帝國大学まで出て、小学校の教員になるとは」という田舎の社会的通念から、また父が帝大を出れば、学者になると考えているだろうとの懸念から、父の受けるショックを恐れたという。

ところが、清原さんの報告を笑顔で聞きながら、父は「鶏頭となるも、牛尾となるなかれというから」と言った。このときの父の承認は、深い印象として残っているという。

■ 「治安維持法」で検挙された清原道壽委員長

清原さんは、戦時中、不当にも「治安維持法」により検挙されたという体験をされている。

「治安維持法」は、1925(大正14)年に「普通選挙法」と同時に制定された政治弾圧法である。国の体制を変革しようと画策したり、資本主義を否定したりする者を処罰できる法律だった。最大の目的は、普通選挙によって、社会主義・共産主義勢力が議会に進出し、社会運動を鼓舞することで、政治・社会制度が改変されることを防ぐことにあった。この法律は、やがて最高刑に死刑が加えられ、政治運動をはじめ、平和主義者や新興宗教の弾圧にも用いられるようになっていった。この法律に関わった人物のひとりに、幕末の志士にして、明治政府の元勲山縣有朋がいた。

大逆事件と文化人の反応

石川啄木や永井荷風は、大きなショックを受けたが、表立って行動を起こすことはなかった。文化人の中で公然とこの事件を批判したのは、徳富蘆花だけであった。彼は、事件約1週間後に第一高等学校で行われた講演の中で、「大逆事件の審判中當路の大臣は一人も唯の一度も傍聴に來なかったのである—死の判決で國民を嚇して、12名の恩赦で一瞬機嫌を取って、餘の12名は殆ど不意打の死刑—否死刑ではない、暗殺—暗殺である。」(謀叛論)と、政府を徹底的に非難した。

森鷗外は、大逆事件の年『沈黙の塔』(1910年)を書いたが、この作品には大逆事件への批判が暗示されていると考えられている。

鷗外は交流のあった山縣有朋とは、この事件以来会っていないと言われ、事件を知った鷗外は「こん畜生！」と言ったと森鷗外研究の第一人者・元森鷗外記念館館長の山崎一穎が数年前、NHKBS テレビで語ったことがあった。調査したが、出典の根拠がわからなかった。

* * *

清原さんの長女れい子さんが書かれた『雨の日の出獄』(清原れい子著 築地書館1996年)という本がある。「1945年10月9日、雨。1人の小学校教師が豊多摩刑務所を出た」から始まる2年5か月の獄中生活。治安維持法の暗き時代を生きた両親の生活を娘の目で綴り、清原さんの半生を知る貴重な資料になっている。また、清原さん自身もこの本に序文を寄せている。『雨の日の出獄』の本文、清原さんの序文を引用して、メモランダムで紹介、そして筆者がお付き合いをさせていただいた思い出として、追悼文で結びとしたい。

職業指導の実践 滝野川東高等小学校

『特高月報』昭和14年3月、従来のプロレタリア児童教育の基礎陶冶を、卒業後直ちに工場労働者となるべき運命にある高等小学校児童に対して実施すべく自ら希望して、滝野川東高等小学校に転任し、爾来同校においても前記千駄ヶ谷第二小学校に同様の方法に基づき、担任児童を指導啓蒙するが、とくに昭和15年3月の卒業児童に対しては「東あけぼの会」、17年3月の卒業児童に対しては「しのめ会」なるク

ラス会を結成せしめ、爾来毎月例会を開催し、その席上において時局問題等を左翼的立場から解説して……、左翼的文献を回覧せしめて左翼化を図り……。

「なぜ、高等小学校に移ったんだ！」

「社会に出てから、しっかり生きていける力を子供たちにつけたかったからです」

「共産主義の労働者にするためのものか！」

なんと答えても、伊藤猛虎(取り調べを担当した特高警部補)は「共産主義」と結びつけた。

工場街の中にある学校

「1年生を教えたい」という希望を出して1年生を担当していた清原が、「高等小学校へ行きたい」と校長に申し出たとき、校長は意外だという驚きの表情を隠さなかった。「私は、君が1年から6年まで続けて担任したら、どういう教育効果が出るのか、期待しているんだ。君の思う通りの教育実践をして見せてほしい」

渋谷区内でも実力者だった橘校長は、3年間の清原の指導法に関心を持っていたらしく、再三にわたって考え直すように促したが、清原の決意は固かった。

当時、多くの小学校は6年間の尋常科と2年間の高等科を併設しており、東京などの都会では進学する子供たちが学ぶ尋常科の教育に重点が置かれていた。高等科は「進学しない子供たちが行くところ」として、じゃまもの扱いされ、一つの小学校の中でも、優秀な教師やベテランの教師は尋常科の5・6年生を教え、教育に情熱を失った教師や素行不良の教師は高等科にまわされていた。事実、あかつき会の活動にやってくる千駄ヶ谷高等小学校へ進学した教え子たちは、日に日に学校への興味を失っている。

社会の底辺の労働者として働かなければならない子供たちに、自分で生きていけるような力を少しでも身につけてやりたい。小学校1年生から教育していくのが理想だとは思うが、日中戦争が拡大していく中で、それでは間に合いそうもない。急がねば。

各区にはほぼ1校ずつ単独の高等小学校がある。工場街にある高等小学校で教えたなら、もしかしたら、彼らが生きていくための力になれるかもしれない……。そのわずかな期待をどうしても抑えがたかった。

「高等小学校の子供たちは、すぐ社会に出て働かなければなりません。彼らが強く生きていける力をつけてやりたいんです。高等小学校教育をどうすべきか。職業指導はどうしたらいいのか、研究したいんです。私のわがまを認めて下さい」

説得しても無理だと思ったのか、校長はあきらめて、転出希望を市教育局に出してくれた。小学校から高等小学校へ。しかも渋谷区から工場街へ。同僚たちにいぶかしげな思いを残して、昭和14年4月、清原は滝野川区立滝野川東高等小学校に転任した。そこは、田端駅と上中里駅のちょうど中間あたりで、現在は北区立田端中学校になっている。

「殴らない宣言」

清原が新任のあいさつを終えると、商業担当の教員が「気の毒に」というふうに近づいてきた。「あなたの受け持ちは、学校の中でも評判の暴れ者の集まりですよ。大変

ですね」「いや、そのほうが、やりがいがあります」

清原の自信ありげな答えに、その教師は半分苦笑しながら、その場を離れていった。翌日、校長がまったく同じことをいった。

「ですから、うんと締めて下さいよ。まったく豚小屋の中の豚のようなヤツらだ」

何が、子供をそうさせているのか。自分たちの指導力不足を棚に上げて……。いい気なものだ。清原は、そんな教員の態度をにがにがしく思いながらも、また新たなファイトが湧いてきた。全校児童は2学年で約千人。男女別の組編成で、受け持ちは男子の2年生だ。

「僕は、君たちを殴ったりはしない。絶対に手を上げないことを約束する」

清原は教室に入るとまず、子供たちの前で宣言した。「殴らない宣言」は、それまで何かにつけて殴られてばかりいた子供たちの琴線にふれたらしい。まともに向きあってくれる先生、と彼らは直観的に感じとった。1年生のとき、担任に自習ばかりさせられていた子供たちにとっては、授業をきちんとしてくれる教師というだけでもうれしかったのだ。

清原は、千駄ヶ谷第二尋常小学校のときと同じように班を作り、何事も子供同士の話し合いで解決することに指導の重点を置いた。

それにしても、理科の授業では実験が1回も行われていなかったり、朝礼の訓話で校長が明らかに間違ったデータを引用したりと、教員の質はよくなかった。御真影に毎朝土下座をし、子供にも同じことを強要して、長々と「天皇陛下崇拝」を唱える教師がいるかと思えば、柔道八段だが、柔道以外には関心を示さずブラブラしている教師もいた。教員間の学閥意識は強烈で、たまたま人数が多い豊島師範出の教員は態度が大きく、青山師範出は小さくなっていた。

1学期には、大宮まで徒歩で行く剛健遠足、教員遠足、八ヶ岳への職員旅行と、行事が立て続けにあった。その場で一杯飲むのが教員たちの楽しみで、費用は子供たちから集めた校友会費の一部が充てられた。

八ヶ岳行きの夜行列車でのことだった。土曜日とあって、ハイキングや鮎釣りの人々で車中は相当混雑し、外地からの帰郷兵も乗りあわせている。

「東京のありさまを見ると、戦争がバカに見えるよ」

故郷が近づいてきたという気安さだろうか、そんな話し声が清原の耳に聞こえてくる。この非常時局に、この慰安旅行。しかも費用の半分は校友会費で賄われている。うちが裕福なら、中学校に進学したかった子供だっているはずなのに。その校友会費を使うとは。そう考えると、清原は眠れなくなった。許しがたいことだと思いながらも、その一員となっている己れにも腹が立った。

職場訪問と就職あっせん

日中戦争が拡大するにつれ、軍・産業は急速に拡大して、東京や大阪の工業地帯には労働者がどんどん入ってきた。学校に近い王子から赤羽にかけての荒川側には大小の工場が林立している。中小工場の中には日中戦争後、急成長した会社も多く、工場

隣接の空き地に次から次へとバラック式の棟を建て増しして、いかにも雑然とした光景が続いている。

当時、高等小学校卒の児童を雇用する場合は、工場の中に青年学校や技能者養成所を作り、3年から5年の期間、工員養成を行うことが法令で決められていた。

とはいえ、ほんの形ばかり週に1時間程度授業をするところとか、夜間に行うところ、軍工廠のように午後から工業学校に委託するところなど実態はさまざまで、中には立派な校舎や実習所を持ち、2年間は現場を離れて養成を行うという工場もあった。

清原たちは、就職の条件として「工員養成がしっかりしている会社」を前提に考えた。児童の将来を思うとき、青年学校や技能者養成所を持たない工場には就職させたくなかった。それが、教え子に対してできるせめてものことだった。学校では、毎年6月から7月にかけて児童が就職した職場を巡回した。職場訪問の目的は、工場調査にあった。労務係と懇談し、工員の勤務状況や養成状況を実地に見て確かめる。工場の実態をよくつかんでいれば、少年工の教育を真剣に考えてくれる工場に卒業生を就職させることができるし、一方で工場側からの意見を聞き、高等科教育の反省材料とすることもできる。

中でも、荒川の戸田橋に通じる志村にある東京光学は、軍需景気に乗り、新しく完成した明るい5階建ての工場が人目を引いた。しかも工場の裏に十分な設備を持つ校舎があり、実習場には旋盤だけで80台も揃っている。その光景は、清原にはとても魅力的なものに思えた。労務主任は退役海軍大佐だったが、物腰がやわらかく、長年労務係として勤めていたので工員の生活もよく知っていた。

通勤には少し不便だったが、教師の薦めもあって、そこには25人が就職した。しかし、1年間で半数が転職してしまった。それは、朝7時半から午後4時半まで昼食の休憩時間を除いて働きづめで、その後5時から2時間青年学校が開かれるため、どうしても授業中に疲れが出てしまう。帰宅が毎日夜8時では、少年たちの働く意欲は続かなかった。

工場を訪問したとき、それらの設備が昼間使われていないことに気づきながら、立派な設備に目が奪われ、宣伝を鵜呑みにして大勢の児童を就職させたことが悔やまれた。清原たちは、工場調査の結果、養成方法が悪い工場には卒業生を送らないことに決めた。東京光学にも「昼間制の青年学校にしないかぎり卒業生を送らない」と申し入れをすると、労務主任の尽力で、週3日は昼間に授業が行われるようになった。

特殊合金、理研重工業、高砂鉄工所、理化学研究所工作所、亀戸日立工場、大蔵省印刷局、貯金局などを巡回すると、工場側から数学の学力不足が指摘された。作業に必要な分数の割り算や足し算すら満足にできない子供もいたからだ。

夏休みに入ると、2年生は工場へ夏季実習に行く。清原は1年生の子供たちを6、7人ずつ集めて、奥多摩にキャンプに連れていった。

年の暮れになると、官庁関係の就職あっせんが始まる。軍工廠の人事係の将校は、お国の非常時だ、児童をよこすのが当たり前、といわんばかりに威丈高にやってきた。「あなたのところは、養成所がないではありませんか。法令で作ることに決まってい

るんですから、ないところには児童は行かせられませんよ」

清原にはっきりいわれて、人事係はムツとした顔で引き上げていった。戦時体制下で、働き口はいくらでもある。年が明けると、民間企業の就職あっせんが始まり、1月の終りにはほとんどの児童の就職が決まった。軍工廠からはその後もたびたび将校がやって来た。人が集まらないと自分の責任になるので、将校は来るたびに低姿勢になった。

『雨の日の出獄』（清原れい子著 築地書館 1996年）の序文

あの時代のこと

清原道寿

本書は、ものごとを自由に考え、実行することが許されぬ時代に生きざるを得なかった、1組の夫婦の物語を、娘が記したものである。小学校の教師とその妻という、いまの時代ならごく平凡な生活を送ったであろう2人は、1943(昭和18)年に悪名高い治安維持法によって獄の内外に引き裂かれ、さまざまな苦難を味わうこととなった。これは当時、ことさら特異なケースだったとはいえ、事情によってはだれもがそうなり得る危うい時代であった。

昭和の初めから1945年8月15日の敗戦までの時代は、天皇は神の子孫の現人神として、神聖にして絶対的な統治者であることを国民にたたき込む政策がとられた。こうした絶対主義的天皇制について、疑問や批判を持っていることがわかると「非国民」とされ、さらに昭和10年代以降になると、治安維持法違反で検挙されるようになった。教育の現場で、人を人と認め合う「人間平等観」の教育が許される時代ではなかったのである。

ヨーロッパでは1922年10月、イタリアにムッソリーニのファシスト政権が成立し、世界大恐慌後の1933年1月には、ドイツにヒトラーのナチス政権が誕生した。私が、鹿児島県の第七高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部教育学科へ進んだのは、そんな最中の1931年だった。その年の日本の失業者数は200万人前後といわれているが、名目的には農業就職者になっていた半失業農民は計算されていなかったから、実際は数百万人であったろうと考えられる。このように大量の失業者がいる社会では、新学卒者の就職はむずかしく、映画の題名「大学は出たけれど」が就職難を表す流行語となっていた。

ところが、東京市や近傍の千葉、埼玉県などでは小学校教員の不足が続き、中等学校教員免許取得者および取得見込者を対象に小学校代用教員採用試験を実施していて、在京の私立大学卒を含めて多数の応募者があった。このため、私が渋谷区の千駄ヶ谷第二尋常小学校に勤めた1936年には、東京帝国大学の文科系卒業生も、東京市の小学校教員として50数名在職していた。

私が滝野川区(現・北区)の滝野川東高等小学校に転任したのは、1939年4月である。この年度には「国家総動員法」により第一次労務動員計画が立てられ、1年間に必要

な一般労働者総数を約109万5千人と推算して、労働力の供給源の第一を高等小学校新規卒業者においた。労務に関する法令がいくつも出され、国営の職業紹介所なども発足した。しかし、態勢が整わず、労働力を計画通りに集めることはできなかった。

とくに重点のおかれた軍需産業では労働力不足が著しくなり、卒業期には学校近くの軍需工場の労務係が求人に殺到した。政府は必要な労働力を充足するため、「青少年雇入制限」を出し、小学校・中学校卒業生(男子30歳未満、女子20歳未満)は第3次産業や平和産業には就職できなくなり、職業選択の自由が禁止された。このころ、宿直の夜、何人かの児童の父親から相談を受けた。「子供を一生、職工で終わらせるよりも、将来商店の主人にしたいので、知り合いの店に小僧にやりたいが、先生なんとかありませんか」と頼まれたが、私には工場で熟練工となる意義を説明することしかできなかった。こののち、第二次・第三次労務動員計画と続き、時局に不要不急な商業・サービス業従事者の強制的転職などまで実施された。

こうした中で、1937年から翌年にかけて、人民戦線事件として社会民主主義グループの学者や評論家、日本無産党とその傘下の労働組合幹部らが治安維持法違反で検挙された。当時の司法省当局は、「今や民主主義、自由主義の思想は、共産主義思想の発生の温床となる危険性が十分ある」と発表した。この見解では、東京帝国大学セツルメントでの活動を生かし、東京市の小学校で、子供たちが合理的、自主的にものごとを考えられるような教育実践をしたいと願っていた私たちのグループにも、いつ治安維持法違反の検挙の手が伸びるかもしれないなかった。

しかし、さきの見解は、敗戦後に治安維持法が廃止されるまで、司法省当局の常識となっていたから、私たちがにらまれたのは当然であった。40年には、上代史・神代史の学者、津田左右吉の著書が、日本上代の各種文献の実証的研究によって「紀元二千六百年は認められない」としたことが問題となり発禁とされ、さらに「皇室ノ尊厳ヲ冒スル」として、著者と岩波書店は起訴された。このような思想弾圧は、こののちますます激しくなり、「戦争は負ける」といっただけで、治安維持法違反として検挙される者もいた。いまの若い人たちには想像もつかぬくらい恐ろしい時代だった。

戦争の拡大にともなって、「国家総動員法」により、国民生活に関係あるたくさんの物資統制法が出された。たとえば「綿糸・綿織物製造禁止令」、軽佻浮薄という理由で「パーマネント禁止令」、「純白米禁止令」、「学生長髪禁止令」、制服(男子スフ入り国民服、女子モンペ)強制、「軍需関係材料の民需用使用禁止令」、「物価統制令」などである。

以上のような統制によって、国民生活におけるヤミ時代が始まり、ヤミ買いなしには生活ができなくなった。戦時下には映画「愛染かつら」が大いに受けて、主題歌の「旅の夜風」の「花も嵐も踏み越えて……」が大流行していたが、民衆はすぐに替え歌を作り、「窓もガラスも踏み越えて、行くがヤミ買い生きる道……」と歌って、買い出しに行った。これも、生まれた時から豊かな物資の中で育った若い人たちには理解できぬことだろう。

いま、オウム真理教事件をきっかけにして、破壊活動防止法の適用が論議されている。かつて、私の人間平等観に基づいた教育が治安維持法違反とされたが、この法律は治安維持法と性格を同じくするものである。そういう意味でも、本書はとくに若い世代の人たちに読んでもらいたいと念じている。

1996年5月3日の憲法記念日に

■ 清原さんの名言「教育の主権は、教育の現場にある」

筆者が清原さんに初めてお会いしたのは1974年頃で、国学院大学の後藤豊治先生の研究室であった。産教達の研究会であったと思う。専門用語(technical term)の話題になり、清原先生が東ドイツの教科書のことを熱っぽく話されたのが印象的であった。

「技術教育」(現「技術教室」)に教科書の翻訳が連載され、興味深く読ませていただいた。先生が東ドイツに行かれたことがないことがわかったので、筆者は視察旅行を企画した。第2回目の旅行の団長になっていただいた。視察の準備のために、多くの資料を提供してくださり、とても勉強になった。しかし、出発間際に、健康上の理由で断念された。とても残念であった。

特に個人的に親しくさせていただいたのは、奥さまを亡くされてからであった。ある日、先生のところに仲間と数人でお邪魔したとき、最後にまとめた本があり、自費出版するつもりだと言われた。原稿を見せていただき、何度かお宅にお伺いし、先

生と打ち合わせをした。編集委員会を持ち、農山漁村文化協会に働きかけた。ご高齢にも拘らず、執筆の熱意には驚かされた。上梓したのが^{ひっせい}畢生の大書『昭和技術教育史』(写真3 清原道壽著A5判 1040ページ 1998年)である。この著から「教育の主権は、教育の現場にある」という思想を教えていただいた。

その間、個人的に話をさせていただいたのが、財産になった。そのなかで「三浦さんの「力学よもやま話」はとてもおもしろかったよ。今まで産教連には三浦さんのような人はいなかったから」と言っていたのが嬉しかった。高倉テルの話。東京工業大学から大東文化大学に移られ、文部省に教育学科を設置申請するときの苦労話。獄中にいるとき、男の子を亡くされたこと(詳しくはお嬢さまのれい子さんがお書きになった清原先生の自叙伝『雨の日の出獄』)など、思い出は尽きない。

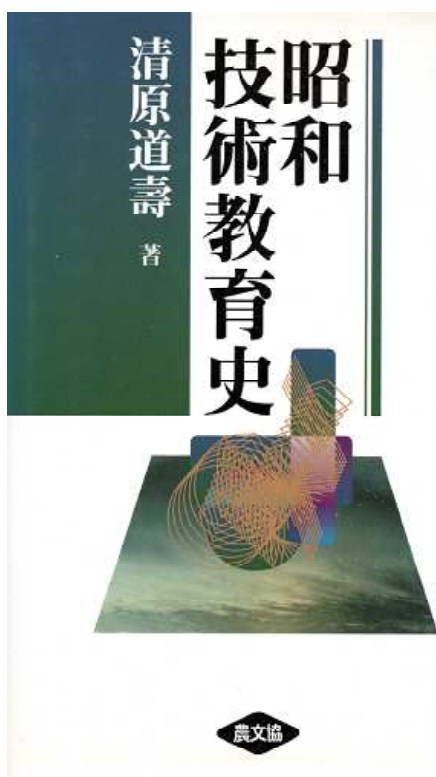


写真3『昭和技術教育史』の表紙

You are always present, time has not erased you.(先生はいつまでも、いつまでも、私たちと一緒にいるのです) (「技術教室」2002年10月号より、一部補筆)

最後に、この拙稿を仕上げる際、東久留米市立中央図書館の司書の方々には、関連書籍の博搜にご尽瘁していただき、感謝いたします。そして、拙稿でも紹介しましたが、清原れい子さんにはご高著の引用を快諾していただき、清原みさ子さんにはお父さまの関係された書籍の出版経緯を丁寧に調査をしていただき、お礼を申し上げます。

略歴

1910(明治43)年7月18日 父淵道、母すまの次男として誕生。
1928(昭和03)年 第七高等学校(鹿児島)入学
1931(昭和06)年 東京帝國大學文学部教育学科入学
1932(昭和07)年 1年間、休学(父の病氣、父の代わりに寺務)
1933(昭和08)年 4月より2年に復学。
1935(昭和10)年 卒業後、1年間大学院に在籍し、中等学校教員免許状を取得。
1936(昭和11)年 渋谷区立千駄ヶ谷第二尋常小学校代用教員として採用さる。
1937(昭和12)年 正教員となる。
1939(昭和14)年 滝野川区(現・北区)滝野川東高等小学校に勤務。
1943(昭和18)年05月10日 治安維持法違反で不当にも検挙さる。
1945(昭和20)年10月09日 釈放。
1946(昭和21)年10月 目黒区立碑尋常高等小学校に復職。
1947(昭和22)年04月 目黒区立第六中学校に転勤。「職業科」を担当。
1949(昭和24)年04月 「職業教育研究会」(後の産業教育研究連盟)を設立。
1949(昭和24)年05月 機関誌「職業と教育」(後の「技術教育」、「技術教室」)発行。
1950(昭和25)年04月 国学院大学助教授に就任。教職課程の「教育原理」等を担当。
1954(昭和29)年04月 国学院大学教授に昇任。
1955(昭和30)年04月 東京工業大学助教授に転任。「教育原理」等を担当。
1969(昭和44)年04月 東京工業大学教授に昇任。
1971(昭和46)年04月 東京工業大学を退官。東京工業大学名誉教授⁷⁾。
1971(昭和46)年04月 大東文化大学教授に就任。
1976(昭和51)年04月 文学部長(～1978年)。
1983(昭和58)年04月 学長に就任。
1984(昭和59)年03月 学長を退任。以後、ライフワークの仕事に取り組む。
1998(平成10)年07月 『昭和日本技術教育史』(農山漁村文化協会)を上梓。
2002(平成14)年06月18日 永眠

<註>

1) 立川図書(株)は、(株)光書房から社名を変えた。教科書発行者番号は33。因みに、1が日本書籍(株)、2が東京書籍(株)、7が実教出版(株)、9が開隆堂出版(株)、178が(社)農山漁村文化協会である。

- 2) 飯島道脩(1883～1962)東京出身。東京外国語学校(現東京外語大学)ドイツ語本科卒。第七高等学校(現鹿児島大学)に1925(大正14)年赴任。在任中、ベルリン大学に留学。ニコライ・ハルトマン教授に師事。カント哲学を学ぶ。
- 3) パウル・ゲルハルト・ナトルプ(Paul Gerhard Natorp 1854～1924)ドイツの哲学者。デュッセルドルフ生まれ。マールブルク大学の教授。新カント派のマールブルク学派を形成。ナトルプの言葉に「人間は、人間的社会によってのみ人間になる」がある。
- 4) 『実践理性批判』は、カントの三大批判のひとつ。『純粋性批判』(第一批判 1781年)、『実践理性批判』(第二批判 1788年)、『判断力批判』(第三批判 1790年)とも呼ばれる。カントは人間の認識の仕組みを『純粋理性批判』で説明した。しかし、この著によると、「神」「靈魂」などの人間が経験できない領域に、人間には推理できない、つまり、神や霊について考えてもわからないということを明らかにした。そこで、カントは新たにこれらを回復するために、道徳的な形而上学をうちたてようとする。その内容が『実践理性批判』である。自然科学の世界では、ニュートンの万有引力の法則がある。そこで、カントは自然の世界と同様に、道徳の世界にも普遍的な法則があると考えた(道徳法則)。
- 5) 滝川事件は、1933年に京都帝国大学法学部教授滝川幸辰^{たしかわゆきとき}が政府から「危険思想」とみなされ、突然休職処分にされた事件。きっかけは、彼の刑法の本などが「社会主義を助長し、治安を乱す」と攻撃されたことであった。京大法学部では、滝川教授の処分に抗議して多くの教授・助教授が一斉に辞表を提出。一つの学部が機能しなくなるほどの「集団辞職」は、当時としてもほとんど前例がなく、新聞も連日大きく報じ、日本中の話題になった。その後1946(昭和21)年、大学と文部省間の交渉で滝川は教授として復帰し、法学部長となる。1953(昭和28)年、京都大学総長に就任。
- 6) セツルメント運動は「人格の交流」という根本的精神がある。活動を行った人たちは「セツラー(貧困地区に住み込む人)」と呼ばれており、代表的な人物にアーノルド・トインビーという青年がいた。トインビーは精力的に活動を行っていたが、病弱であることや活動の多忙さもあり、31歳の若さで亡くなった。セツルメントは1884年、バーネット牧師夫妻が夭折したトインビーを記念してロンドン東部の貧民街に設立した「トインビー・ホール」が世界初とされている。セツルメントの元の意味は「移住」。イギリスの大学教授や学生たちが貧民街(スラム)に移り住み、貧民と生活をともにし、その教化にあたったところから使われるようになった。つまり、社会教化事業を行う地域の拠点のことである。日本には大正時代に紹介され、社会人のほかに東京帝国大学の学生を中心に活動が開始された(帝大セツルメント)。清原さんも積極的に参加されている。
- 7) 名誉教授の称号資格は、各大学により異なる。清原さんの教授年数は2年。東京科学大学図書館に問い合わせると、「清原道壽氏は東京工業大学名誉教授で間違いございません。当館ではそれ以上の調査には対応することができません。お役に立てず恐縮ですが、何卒ご了承ください」の回答があった。

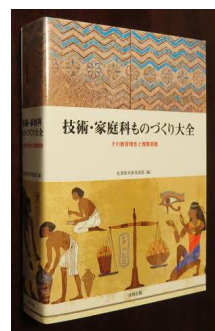
「技術教室」「技術教育」全号公開

産教連が編集していた「技術教室」誌が休刊となって(2011年12月号にて休刊)からすでに15年近くが経過しています。この間、新潟大学教育学部の鈴木賢治氏および同学部技術科の学生の尽力により、「技術教室」ならびに「技術教育」の公開版が完成の運びとなっています。技術教育・家庭科教育の実践・研究に大いに役立つものと期待されます。産教連のホームページからアクセスできますので、ぜひご利用ください。
(編集部)

『技術・家庭科ものづくり大全』が刊行されました

2021年8月、産教連編による『技術・家庭科ものづくり大全』が合同出版から刊行されました。75年にわたる産教連の研究と実践の活動の集大成ともいえるべき書籍で、A5判、656ページの大著(定価：本体3000円＋税)です。

学校現場で技術教育・家庭科教育に直接携わる教員だけでなく、技術教育・家庭科教育に関する研究者やものづくりに関わりのある多くの方々が本書を手にすることを希望しています。



メーリングリストの積極的な活用を

今や、インターネットの利用は当たり前です。「最近、図書館でこんな本を見つけました」「こんな情報を耳にしたのですが、もっと詳しいことを教えてください」というようなことを産教連ネットへ載せることで、情報交換の輪が広がります。

産教連ネットに情報を発信することが活用の第一歩となります。この産教連通信でも、産教連ネットへ発信された情報を編集し直し、「会員からの便りを紹介します」というタイトルで、随時、紹介していますので、参考にしてみてください。

産教連ネットへの登録手続きについては、まずは事務局へご連絡ください。連絡先は本号の最終ページに記載されています。
(編集部)

□ 編集部ならびに事務局から

産教連通信の執筆要項を産教連のホームページ上で公開しています。この規定に沿って、原稿をお願いします。原稿の送付先は編集部(下記参照)です。会員の皆さんの寄稿を待ち望んでいます。

さて、コロナ禍のなか、2021年夏に開催された連盟総会で、今後の活動規模を縮小することが決まり、実行に移されています。皆さんがご覧になられているこの産教連通信も、それまでの隔月刊(奇数月発行の年6回)から季刊(年4回の発行)に変更になり、ほぼ5年を経過しようとしています。

ところで、事務局や財政部などから出された郵便物が宛所不明で戻ってきてしまうことがたびたびあります。それが日常の活動に関する重要な文書だったりすると、会員の皆さんにとっては不利益を被ることもあるかと思います。どうぞ、**人事異動や転居などで住所・電話(FAX)番号・勤務先などに変更があった場合には、お手数でも、すみやかに事務局(下記参照)までご連絡をお願いします。また、メールアドレスの変更についても、同様にご連絡くださるとのりありがたいです。**

編集後記

本号11～13ページにもあるように、今年の全国研究会は昨年(2025年)と同じ場所を会場として、8月1日から8月2日にかけて実施されます。今回の研究会を産教連のこれまでの研究活動の総括の場と位置づけ、討議を展開することになるかと思っています。

過日、討議の元となる資料が編集子のもとへ送られてきました。これは産教連の会員に事前に配付されたものです。小生も会員の一人なので、送付されたわけです。この資料は、研究会当日に参加者全員に配られるはずです。

産教連が70年以上にわたって続けてきた研究活動を整理する形でまとめられたこの資料に目を通しています。研究会当日までに頭の中に整理し終わるように、読みこなしていくつもりです。
(金子政彦)

産教連通信 No.78 (通巻 No.259)

2026年7月20日発行

発行者 産業教育研究連盟

編集部 金子政彦 〒247-0008 神奈川県横浜市栄区本郷台5-19-13

☎045-895-0241 E-mail mmkaneko@yk.rim.or.jp

事務局 野本恵美子 〒224-0006 神奈川県横浜市都筑区荏田東4-37-21

☎045-942-0930

財政部 藤木 勝 郵便振替 00120-8-13680 産業教育研究連盟財政部